

鳥取県西部地震から15年

震災乗り越え住民主役のまちづくりが進む

地震発生から

復興までの歩み

今から15年前、平成12年10月6日に、マグニチュード7.3、震度6強という、阪神淡路大震災をしのぐ大地震に遭遇しました。幸いにも、死者こそ発生しなかったものの、誰もが想像すらしなかった大きな被害をもたらしました。

人的被害は比較的少なく、火災も発生しませんでした。住宅被害は、全壊129戸、半壊441戸、一部破損945戸、計1515戸と町内のすべての家が被災しました。加えて、公共の建物をはじめ、道路や橋、上下水道、農地など、さまざまな施設にも被害が生じました。

国の激甚災害の指定を受け、住宅の建て替えを始め、道路・施設などの震災復旧は着々と進められました。そして、地震発生から3年

後、平成15年11月30日、町文化センターで震災復興記念式典が開かれました。そのステージ上で、町内の小学生4人が、それぞれ「復興」「宣」「言」と書いた垂れ幕を披露し、町長とともに鳥取県西部地震からの復興を宣言したのです。



平成15年11月に復興宣言

震災後、町村合併破談・財政破たん宣言という大きな出来事もありました。

町村合併では、江府町との合併協議会が開かれ2町合併が進められてきましたが、住民投票の反対などもあり約10カ月で終止符が打

たれました。

また、震災以前から、町民の暮らしの利便を図るため、さまざまな公共工事を行い、その財源の多くを借金（起債）に頼ってきた。それらの返済が重なる時期を迎え、平成17年には一時財政破たん宣言を行うなど、財政状況は厳しいものに。以後、行財政改革と財政の健全化（自主再建）という長い道のりを歩んでいくことになりました。

住民主役のまちづくりへ

地震や財政難で町に暗雲が立ち込めていた時、町の魅力である自然や歴史、文化を生かした住民活動が次々と活発化し、町を元気にしてきました。

まず、その代表が金持神社を生かした町観光協会の取り組みです。平成18年4月からオープンした「金持神社札所（売店）」では、「黄色いハンカチ」や「金持神

社万札扇子」「金持神社の棚からぼたもち」など、ネーミングを生かした特産品づくりを展開。金運、開運を求めて、現在ではおよそ年間20万人以上の参拝客が訪れる場所となっています。

オシドリが

復興のシンボルに



日野川に群れるたくさんのオシドリ

夫婦仲が良いことで知られる鳥、オシドリ。平成の初めごろから、1人の住民が、日野川に飛来するオシドリの保護に努め、次第に協力者が増えグループに発展し、手作りで観察小屋も整備しました。近年は多い

ときには1000羽以上が飛来し、その美しい姿に魅せられています。

地震発生時、観察小屋はオープン一カ月前でしたが予定通りオープン。多くの人々が訪れ、「震災に負けないで」と言っているかのようなオシドリの姿に元気づけられました。

オシドリを通じて、全国の人たちとの交流も生まれています。東京都杉並区にある小学校では、児童が毎年オシドリ見学や夏休みの田舎体験に訪れています。町出身の教員が勤めていた縁で、学校からエサのドンガラを送ったことがきっかけでした。訪れた子どもたちは「オシドリ天使」と呼ばれ、その交流は今も続いています。

黒坂の歴史を生かして

元気な地域づくり

震災の被害が大きかった黒坂のまちでは、城下町の歴史を紹介し、地域の再発

見につなげる取り組みが勧められています。平成19年に住民グループ「黒坂鏡山城下を知ろう会」が設立。以来、敷になっていた黒坂城址の石垣周辺の木竹を伐採し、石垣が見えるようになりました。



黒坂の歴史を生かした地域づくり

「地震で被災し下向きになった気持ちを上向きにならないか」という住民の思いをきっかけに、今では、毎年、8月14日に、「鏡山城址ライトアップ」を実施、地域の風物詩になっています。そのほか、宝仏山登山や日野川くだりラフティング、「たたら製鉄」を紹介する取り組みなど、地域の自然や歴史などを掘り起こし生かす活動が、震災後の元気な地域づくりにつながっています。

震災を乗り越え

生まれた新たな姿

震災後、地域で防災組織の発足、防災訓練も重ね、自治会などによる災害時の要援護者の支え合い体制も進むなど、絆が強まり、地域の防災力は高まりました。また、住民主導による自然や歴史、文化を生かした地域活性化の取り組みも進んでいます。まさにこうした住民主役のまちづくりが芽生えたことが、震災や財政再建を経て町が変わった姿のひとつといえます。

将来を見据えた

まちづくりが課題

内閣府による日野町の人口推計では、45年後の2060年には1092人と、現在の3分の1に減少すると推計されています。せつかく高まった地域防災力も過疎、高齢化がさらに進むと、体制を維持できなくなる可能性があります。今後、町には移住定住の促進などの若者を呼び込むまちづくり、高齢化に対応した人材育成などが求められています。

地域で支え合う

「支え愛マップ」から見えた地域の姿

震災後、地域で防災組織の発足や防災訓練の実施、支え合い体制の構築などを通じ、地域の絆や防災力は高まりました。

舟場昭和会では、地域での支え合いと見守りを目指して「わが町支え愛活動支援事業」に取り組みました。

その取り組みについて、同会会長の田口防史さん（舟場）に話を伺いました。

「わが町支え愛活動支援事業」とは、地域の高齢者や障がい者など要支援者の支え愛マップの作成や見守り体制の構築など、支え愛活動を行う自治会などに対し、補助を行うものです。

舟場昭和会では、昨年度その事業に取り組みしました。

「取り組みだきつけを教えてください。」

舟場昭和会では銭太鼓の練習で毎月1回、みんなで集まっています。その中で、舟場も高齢化が進み、万が一の時に不安だという声が上がリ、みんなで取り組んでみよう決めました。

「事業の中でどんなことに取り組みましたか。」

まず、車いすを4台購入

しました。舟場は4班に分かれているので、それぞれの会員の自宅に設置しました。そして、支え愛マップを作成しました。

「支え愛マップ作成に取り組んでどうでしたか。」

今までそれぞれが把握していた情報が共有でき、地域全体で支え合いや見守りをしていくという意識が高まりました。要支援者や避難経路の確認ができただけでなく空き家の把握もできました。そのほか、地震や水害などが発生した時に危険な場所などの情報も共有でき、一人一人の意識が変わりました。

「これをどう生かしていきたいですか。」

万が一災害が起こった時に迅速に動けるよう活用に

要支援者や避難場所、空き家などにシールが貼られ、危険箇所などには付箋に書き込み情報共有



ていきたいです。また、町全体でもこうした取り組みがもつと進み、防災意識の向上につながればうれしいです。

支え合い(防災福祉)マップづくりの手順

- ・空き家に●(青)シールを貼りましょう
- ・コミュニティセンターなど集合場所に●(黄)シールを貼りましょう
- ・自治会長、民生委員さん宅などに●(緑)大シールを貼りましょう
- ・避難支援などが必要そうなお宅に●(ピンク)シールを貼りましょう
- ・ちょっと気がかりなお宅に●(赤)シールを貼りましょう